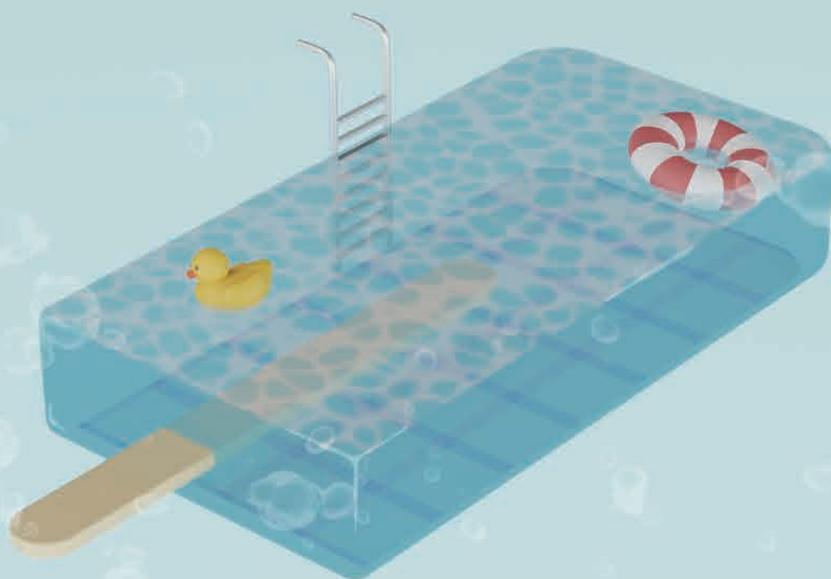


子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

# 文化高知

2025年8月 NO.240



[もくじ]

- 2～3 人生はよろこばせごっこ～やなせたかしの生き方～…仙波美由記  
4～5 顕微鏡—僕の科学と記憶の原点…長崎慶三  
6～7 和紙と生きる日々—高知で見つけた、私の表現…竹山美紀  
8～9 「このホラーがすごい！」第1位について語らせてくれ！…山中由貴  
10 魚と恋して～鏡川水生生物研究会設立に至るまで～…小野 晁  
11 「アンテナ」きもキャラグランプリ2025参戦…下尾 仁  
12～13 高知市文化振興事業団5～7月の事業から  
14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「アイス」矢野健太

公益財団法人高知市文化振興事業団

# 人生はよろこばせごっこ くやなせたかしの生き方

仙波 美由記

一 昨年の「らんまん」に続き、

四月から再び高知を舞台にしたNHK連続テレビ小説「あんぱん」が放映されています。やなせたかしとは、どのような作家であったのか。高知県の方でも今回のドラマをきっかけに知ってくださった方も多いかもしれません。

やなせたかし（一九一九〜二〇

一三）は香美市香北町出身の漫画家であり、詩人・絵本作家・イラストレーター・雑誌編集など、幅広い分野で活躍したマルチクリエイターです。代表作である「アンパンマン」は、自身の生い立ちや戦争経験などをもとに、時代や国や宗教などに左右されない真の正義。「逆転しない正義」とは何かを問いつけ、やなせなりの結論と

して具現化させたヒーロー像です。

やなせがそういったヒーロー像を生み出した背景には、やなせの生い立ちがかかわっています。やなせは、新聞記者をしていた実父と五歳で死別し、小学校二年の頃に再婚によって柳瀬家を出て行った実母とも別れます。二歳下には弟がいましたが、弟は先に医者をしていた伯父（父の兄）の養子となっていました。まだ母が恋しい年頃であったやなせでしたが、小学校二年からは弟が養子に入った伯父の家に預けられ、兄弟として同じ家に暮らしながらも自身は当時一緒に同居していた父の弟と一緒に緒の部屋で、居候として遠慮がちに過ごす毎日でした。

やなせ作品の中でアンパンマン

とともにロングセラーとなっている絵本『やさしいライオン』『チ

リンのすず』（いずれもフレール館）では血のつながらない親子関係とそれによってもたらされる悲劇的な結末が描かれています。やなせの作る物語には、このような本当の親子ではない家族像がよく登場します。それはやなせ自身の生い立ちからきていると考えられますが、やなせ作品最大の魅力は誰もが心の奥に抱えている、この「生きるかなしみ」がきちんと描かれているところにあります。やなせ作品はアンパンマンに代表されるような愛や勇気といった「生きるよろこび」に注目が集まることも多いのですが、その裏側にある「かなしみ」を描くこと、

子ども向けの絵本であってもその陰の部分を引きちんと描く、それこそが多くの読者から支持され続けている所以ゆえんでもあります。

また、やなせは非常に遅咲きの作家でもあります。働き盛りだった四十代から五十代にかけてはヒット作に恵まれず、後輩の漫画家たちにも追い越され、依然として絶望の中にいました。アンパンマンがテレビアニメとなり全国的な人気作家の仲間入りを果たした頃には、やなせは既に七十代を迎えていました。

長らく「くる仕事は全て受ける」という精神で、漫画家以外の仕事にも挑戦し続けていたやなせは、それらの経験が全て血肉とな



り、最終的にマルチな才能を開花させ唯一無二のエンターテイナーへと変貌していくのです。

やなせは後年「生きていく以上、自分の命をできるだけ有意義に使って暮らしたい、それは他者を助け、喜んでもらうことに繋がる。

「よろこばせごっこ」をすれば、誰もが幸せに暮らせると思う」と語っていました。大器晩成であったやなせが最後に見つけた「生きる意味」とは、経済的な豊かさや社会的な名声を得ることではなく、自分の作品を通じて目の前の人を笑顔にする、ということだったのです。

その「よろこばせごっこ」を象徴するような場所として、来年開館から三十周年を迎える「香美市立やなせたかし記念館アンパンマ



ンミュージアム&詩とメルヘン絵本館」があります。アンパンマンミュージアムの開館当時、七十七歳だったやなせが、訪れる子どもたちを笑顔にしようと、この記念館のために新しくキャンバス画を描き下ろし、玄関ポーチのタイルから、館内の壁紙に至るまでオリジナルのイラストを新たに描いて準備をした特別な場所です。

現在、記念館では、「あんぱん」の放映期間にあわせ、特別展「やなせたかし ぼくと詩と絵と人生」とを開催中です。この展覧会では、アンパンマンの作者・やなせたかしとして遺した数多くの作品だけではなく、その人生についても多くの方に知っていただくのと所蔵する原画原稿の中から、初公開となる資料も含め、四〇〇点を超える過去最多の作品資料を三会場に分けて紹介しています。

生前やなせ自らが希望した、子どもから大人まで気軽に楽しめる「美術館を目指し、これまであえて文字の多い解説などを避けてきた記念館ですが、第二会場となる「詩とメルヘン絵本館」では、



やなせたかしの人生を真っ赤な巨大大年譜に仕立てて、九十四年の歩みをしっかり文字で紹介し、あわせて遺された肉筆原画も振り返ることができるコーナーにしました。そのほか、やなせ最晩年のアトリエ再現コーナー、オシャレにもこだわりのあったやなせのワードローブを披露するコーナーなど、やなせの人となりが見ええるようなプライベートな資料も多数展示することにより、大人だけの来館者であってもじっくりと鑑賞いただける内容となっています。

やなせ自身が様々な人生の苦境を乗り越え、晩年アンパンマン作品で成功を収めるまでの過程やそれを支えた自身の人生観、またそ

こから生み出された作品の数々をご紹介するとともに、没後十二年を経てなお、我々に「希望」を与え続けるやなせ作品の魅力。この機会にぜひ記念館に足をお運びいただき、やなせの肉筆画によって存分に味わっていただければ幸いです。

◎やなせたかし

◎やなせたかし

フリーベル館・TMS・NTV  
画像提供：公益財団法人やなせたかし記念館アンパンマンミュージアム振興財団

せんば みゆき

公益財団法人やなせたかし記念館アンパンマンミュージアム  
振興財団 事務局長(学芸員)  
米留学後、民間ギャラリー勤務を経て二〇〇三年、財団に学芸員として入職。やなせたかし作品の収集・保存・研究などを行い、香美市立やなせたかし記念館の展覧会事業に携わる。二〇一二年より現職。事務局長として法人運営全般に従事しながら、日々やなせたかしの作品の普及、振興に努める。

# 顕微鏡——僕の科学と記憶の原点

長崎 慶三

## 1. ラッキースタンプ

小さい頃から無性に生き物が好きだった。池や小川があると、必ず身を乗り出して覗き込んだ。そこに棲む小さきものーアメンボウやガムシやタニシやオタマジャクシに心躍った。たも網で捕まえてきては、何とかして飼おうと試みた。上手く飼えないものもいたが、タニシは子供を産み、オタマジャクシはカエルになった。間近で生命の不思議を凝視できた素敵な時間。やがて図書館で読んだ本がきっかけで、興味は微生物へと移っていく。プラシクトンが観たい。ミジンコが、ゾウリムシが、ツリガネムシが観たい。だが、それらの観察に必要な「顕微鏡」はどうやらとても高価なものらしい。入手はなかなか難しいかも。

閑話休題。小学生当時、筆者の

故郷岡山に「ラッキースタンプ」という商店組合のポイントサービスタンプがあった。一〇〇円でシール一点分。それをアルバムに貼っていく、点数が貯まったらカタログの商品と交換できるというものだった。ある日のこと、母が持っていたラッキースタンプのカタログを何気なくめくっていた。冷蔵庫・洗濯機・テレビなどの大型家電、オニオンスライサーやトースターなど小型家電の間に、何ともちっぼけな顕微鏡がポツンと並んでいる。心躍った。その瞬間のことは鮮明に覚えている。

道はある。少なくとも努力すれば手に入るかもしれない顕微鏡がそこにある。この事実は当時の（まだ純粹無垢で計算を知らない）小

学生を大いに元気づけた。その日

から、我が家の買物は率先して引き受ける。多少遠かるうが、ラッキースタンプのある店に行く。自転車のパダルも軽く、走る走る。あと少し、あと少し貯まったら顕微鏡が手に入る。そう思って頑張った。雨の日も風の日も、それこそ雪の日も。

しかしやがて、現実気づく日が来る。算数なんか習うからだ。我が家の買物への年間支出額を百で割っても、どう考えても顕微鏡に必要なポイント数には届くはずがない！ 誰も嘘なんかついたりしない。でも、何かにひどく裏切られたような気分。努力しても届かない現実であるということを知って、勝手に拗ねて落ち込んだ。顕微鏡など所詮見果てぬ夢。十歳

だった筆者は勝手に世界と約束していたのだ——頑張れば夢は叶うと。

## 2. 顕微鏡が来た！

顕微鏡は手に入らない。そのことをゆつくりと受入れたのだから興味は再び友人たちとのサッカーやドッジボールに熱中した。クラス誰が〇〇ちゃんを好きで、でも〇〇ちゃんは××君を好きで。そんな心地よい日常に浸っていた頃、サブライズが届いた。

両親からの顕微鏡だった。すっかり手伝いの買物を引き受けなくなった息子を心配したのか、それともそれまでの努力に報いてやろうと思ってくれたのかはわからない。でも顕微鏡だ。カタログにあった本格的なものとは違うけど、まごうことなき顕微鏡だ。

少年の微生物愛に再び火が灯る。ごめん、サッカーもドッジボール



もしばらくパスだ。小学校敷地のあちこちに溜まった水をすくい集め、一目散に帰宅。マニュアルと照らし合わせつつ、愛おしい相棒を操作する。スライドガラスに池の水を一滴。そこにカバーガラスを載せていざ観察。光を調節し、ピントを合わせると；見たことのない宇宙。そこに彼らは居た！

ミジンコの透明な体。ビクンビクンと運動している。本で見てもの形は知ってはいたけれど、実物はぜんぜん違う。生きている。こんなに小さいけど、目も口も触角もあって、体の中には内臓と思しき構造まである。不思議な快感に酔いしれた。音はない。動きだけが支配している世界。でも、確かに生命が躍動している！

次いで植木鉢に溜まっていた濁り水。倍率を上げる。赤っぽい楕円形の点々が大量に優雅に舞う。ゾウリムシだ。図鑑で見たゾウリムシはたしか周りに細かい毛がたくさん生えていた。おそらく奴だ。知らなかった、ミジンコとゾウリムシはこんなにサイズが違うんだ。ただこの顕微鏡ではゾウリムシの詳細な構造までは分からない。ち

よっと悔しい。だけど嬉しかった。見たことのない生き物の世界にいま自分は繋がる術すべを持った！そのことに心がときめいた。その後も、いろんな場所から溜り水を取ってきて観察するのはすこぶる楽しい時間だった。

顕微鏡を贈ってくれた両親は、三年前、二人とも八十九歳で亡くなった。あのときなぜ顕微鏡を買い与えてくれたのか、考えてみると正面から尋ねたことはなかったなあ。結局大人になっても顕微鏡を覗く類の仕事に就いた自分を一体どう思っていたのか。生きてるうちは生きていくことに懸命で、なかなかそうした話をするのもな

かったような。こっちであと何十年か頑張つて、そのあと彼岸に渡つた際には是非訊いてみようと思ふ。

### 3. レーウエンフックのこと

世界で初めて高倍率な顕微鏡を発明したのはオランダのレーウエンフックという呉服商だった。彼が発明した虫眼鏡状のシンブルな顕微鏡は最大五〇〇倍の拡大率が誇り、彼をミクロの世界へと誘った。水たまりの水の中に無数の微生物を見つけた彼は、生涯その魅力から逃れることはできなかった。どれだけ金銭を積まれても顕微鏡を決して他者に譲渡することはなかったし、作り方も教えなかった。おそらく、ミクロの世界という秘密の花園を自分だけのものにしておきたかったのではないか。

自分の子供時代の思い出を書きながら、この先人の逸話を思い出した。ミクロの世界に見えるものがすべて世界初の発見であったレーウエンフック。彼の興奮する様子を想像するだけで気持ち弾む。未知の扉を開く。扉の陰から射しってくる魅惑的な光。その光を浴び

ることで人は不思議なエネルギーを授かるのかもしれない。

彼は、医療技術もさほど発達していなかった一七世紀になんと九十歳まで生きた。八十歳代まで観察を続けていたのだという。彼だけの秘密の花園が彼に与えていた奇跡のパワーは計り知れない。

誰もがきつと自分だけの花園を持つていることだろう。そしておそらく、あの「最初に光が射した瞬間」を忘れられないのではないか。生涯忘れ得ない宝物だ。

#### ながさき けいぞう

一九六一年 岡山市生まれ。高知大学理工学部教授。専門分野は海洋ウイルス学。趣味はテニス。著書に「ニヤガサキ博士のゆるふわウイルス学入門（教育評論社）」、「まんが微生物ハンター列伝（株式会社ねこの森）」、「ネオウイルス学（集英社新書、分担執筆）」。



# 和紙と生きる日々

## — 高知で見つけた、私の表現

竹山 美紀

初めて和紙に触れたのは、小学生の頃。母と一緒に、ちぎり絵のキットのようなものを楽しんだ記憶がある。自分が夢中になっていたのはもちろんだが、ふと顔を上げると、私以上に没頭している母の姿が目に入った。その横顔は、いつも忙しそうな「お母さん」ではなく、ひとりの女性に見えた。

そして、私はその姿にとっても幸せを感じた。

和紙ってすごいな。覚えておくう。

幼いながら、そう強く心に刻んだ気がした。けれど、実際にはそ

の記憶もすっかり心の奥深くに仕舞い込まれ、長らく忘れていた。

当時、私は学校でいじめを受けていた。担任の先生に打ち明けても、「いじめる側にも理由がありますから」と取り合ってもらえなかった。教室にいても、味方は誰もいない。そんな日々の中で、母とちぎり絵をして過ごした夏休みのあの時間は、この世界の中に救いを見つけようと健気に生きる私にとって大きな発見だった。和紙を手にしてきたあのときの感覚と、母の横顔は、心の深いところで私を支えてくれていたのだと思う。

その後も絵が好きでいながらも、私は自分に才能があるとは思えず、

中学・高校時代は体調不良も重なって学校にもあまり通えなかった。進路に悩んだ末に、美術作家ではなくアートの携わる仕事を志して青山学院大学に入学したが、芸術に触れ続けるうちに、むしろ「自分も表現したい」という想いが強くなっていった。そして、二十歳を過ぎてから東京藝術大学の油画科を目指し、一年半の予備校生活の末、無事に合格を果たした。

しかし入学後、思うように描けなくなかった。追い打ちをかけるように油絵具の匂いで体調を崩すようになり、画材や素材に悩む日々。何を描きたいのかも見えず、自分の存在意義さえ揺らいだ。心が折れそうになっていたある日、不意に、あのちぎり絵の記憶がよみがえった。あのときの和紙の優しい手触りと、母の無心になった横顔。

そうだ。和紙があった。

二十年前に「和紙」という言葉が頭に浮かんだ。

そこから、和紙を使った創作が私の中で少しずつ始まった。心の張りつめた糸がほぐれていくような感覚があった。そして数年後、運命としか言いようのない、和紙が導く縁の連鎖によって今の夫と出会い、夫の暮らす高知県の越知町に移り住むことになる。

高知の自然は、まるで絵の中に入り込んだように鮮やかで、音や香りまでが生き生きとしている。目の前を流れる仁淀川の水の澄みきった青、日々変化する山の色合

い、風に揺れる木々の音。そのすべてが、作品づくりに欠かせないインスピレーションになっていった。

和紙を通して、人との出会いも広がっていった。尾崎製紙所さんをはじめ、地元で手漉きを続ける職人さんたちとの出会い。越知町の方々のあたたかな支え。和紙を使ったワークショップを開くたび、「こんな和紙の使い方、初めて見た」と目を輝かせる参加者の方々。和紙が持つあたたかさが、人と人、自然と人を繋いでくれることを実感している。

最近では「和紙アーティスト養成講座」というオンライン講座も開講した。全国の受講生に向けて、作品づくりや展示・販売の方法を伝えている。高知に来る前に、いろんな地域の和紙を巡り、お世話になった職人さんたちにも恩返しをしていきたいと長らく願っていた夢だった。その奥には、単なる

技法だけでなく、「和紙の魅力を自分の言葉で語れる人」を育てたいという想いがある。なぜなら、現代の暮らしに和紙を取り入れるアイデアや、若い世代の感性と繋がる使い方を広げるには、その背景を知ることでも欠かせないと考えているからだ。その奥深さを知ることができると信じている。

そして今、お店として再利用している築一〇〇年の元薬屋だった建物もリニューアルを行い、さらに和紙の魅力を体感できる場へと変えていく予定である。一階は和紙作品やアクセサリーの展示販売、そして和紙をテーマにしたお菓子を提供するカフェエリアを作る予定をしている。二階は、カフェエリアと和紙アートの制作やワークショップができるアトリエとして活用していく予定だ。この場所が、和紙文化に五感で触れられる「入口」になればと願っている。

あの日、ちぎり絵に夢中になる母の姿を思い出すたびに思うことがある。それは、和紙には人を本来の姿に戻してくれる力があるということだ。描くことに迷ったときも、育児や仕事に追われ心がすり減りそうなときも、和紙と向き合っていると、不思議と心がほぐれていく。そしてまるで、澄んだ水が静かに胸の中を流れていくような感覚になる。

だからこそ、今も和紙が多くの人に求められ続けているのかも知れない。誰もが気づかぬうちに、和紙の優しさや温もり、そしてそれを通して自分を取り戻す時間を必要としているのではないだろうか。

和紙は「紙」でありながら、自然そのものであり、そして職人の心が宿るものでもある。一本の楮こうぞが、幾人もの手を経て一枚の紙になる。その過程には、人と自然の関係性、技術と想いの伝承、そし

て時間の積み重ねがある。

これからも私は、その一枚一枚に込められた想いととも生きていきたい。自然とともにこの世界に存在する実感を持ちながら、人と関わり、変わらず美しい「伝統」を未来に繋ぐための新しい形を、この高知の地で出会った自然や人の温もりとともに紡いでいきたい。

#### たけやま みき

一九八八年東京都墨田区生まれ。東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。在学中から和紙に惹かれ、産地を巡るようになる。卒業後はアーティストレジデンスの経験を経て、二〇二一年一月に高知県越知町へ移住。同じく和紙を扱う作家である齋藤与志彰と結婚。現在は、夫婦で店舗を営みながら作品制作や和紙の魅力を伝える活動を行っている。

# 「このホラーがすごい!」「第1位について語り尽くしてくれ!」

山中 由貴

「このホラーがすごい!2025」国内編で1位を獲った作品、上條一輝さんの『深淵のテレパス』が革新的に面白いので、どうしても語りたい。

『深淵のテレパス』は東京創元社が創設した「創元ホラー長編賞」受賞作で、上條さんのデビュー作だ。ホラー案内人、朝宮運河さんがXで読者投票を行った「ベストホラー2024」でも1位を獲得し、各賞総ナメとってしまってもいい。

ホラー小説が大好きなわたしはもちろん早々に読んで堪能したのだが、『深淵のテレパス』につづくシリーズ第二弾『ポルターガイ

ストの囚人』がまたぶったまげる出来栄で、ホラーなのに怖さで身震いするより胸が熱くなって震えるというおかしなことになってしまった。ああ、この二作についてじっくり書ける場があって、ほんとうによかった!!! 文化高知さん、ありがとう!

「変な怪談を聞きに行きませんか?」

『深淵のテレパス』は、ある大学の怪談イベントの場面からはじまる。

会社の部下の弟がやっているというオカルト研究会の、怪談を語るイベントに誘われた高山カレン。

そこで壇上に立った女子学生は、カレンの目を見て「あなたが、呼ばれています」と語りかけてきた。その直後から、カレンは一人暮らしの部屋で怪現象に悩まされるようになり――。

ばしゃり

部屋の暗い場所から聞こえてくる音、ドブ川のような異臭、足跡の形をした緑色の汚水。

連日の怪異に追い詰められたカレンが助けを求めたのは、「あしや超常現象調査」という動画配信者たち。芦屋晴子と越野草太、ふたりは心霊やオカルトに対して否定も肯定もせず、カメラや音声レコーダー、電磁波測定器をつかっ

て怪現象のデータを収集し、相談者の状況を改善しようというシステムだ。

長身で女優も顔負けの美貌と豪胆な性格の芦屋と、彼女の部下で機材担当の覇気のない越野、ふたりの掛け合いも楽しいのだが、彼らに協力するメンバーも個性的だ。元警察関係者の探偵・倉元は、超常現象はまったく信じないがコネを使って実務的な調査ができるし、子ども時代にスプーン曲げ少年として活躍した犬井はオカルトマジックで超能力が使える。

むさくらしい彼らが力を合わせて活躍するさまは、アベンジャーズ感があってめちゃくちゃテンションが上がるのだ!

そもそも目からうろこだったのが、「超常現象は、しょぼい」という芦屋のセリフだ。どんなに恐ろしい怪異でも、何もかもが可能なのでない。犬井の超能力にしても、謎の心霊現象にしても、起ることは制約がある。それをふまえて現象を観察することで対策を講じていく「あしや超常現象調査」の手法は、読んでいてと

ても合理的で新鮮だった。  
ただやみくもに怖いと思っ  
た現象に論理的な説明が  
ついていて、そうすると、  
恐怖心も分解されてい  
くように心強い。じつと  
りした怖さ、得体のしれ  
ない禍々しさのあるホラ  
ーももちろんいろいろ

れど、本を閉じてても怖  
い作品は苦手な人も多  
い。誰にでも薦めたく  
なるような痛快さがあ  
るからこの作品はすご  
いのだ。

そして、『ポルター  
ガイストの囚人』を  
読んでさらに雄たけび  
を上げそうになった。

こちらは売れない俳優、  
東城彰吾が誰も住ま  
なかつた実家にもど  
つて暮らしてはじめる  
と、カタカタと異音  
が鳴ったり、こけしが  
倒れて階段を落ちて  
きたり、鏡に女の姿  
が映ったり、おかし  
なことが連発する。「  
あしや超常現象調査  
」が依頼を受けて家  
の中を調べるが……

読みはじめこそどこ  
かで一度は目にするよ  
うなおソドックスな  
怪現象だが、なんと  
調査を進めるうちに  
東城自身が行方不明  
になってしまう。そ  
して、その後の予想  
外の展開にだいたい戸  
惑う。え、

私ホラーを読んでたん  
じゃなかったっけ？  
これはジャンルが別物  
なのでは……？

その意外性が、あと  
あとピシッと決まる  
のだ。それだけでは  
ない。それまでに張  
り巡らされた伏線が、  
最後に気持ちよくひ  
とつに収束していく。  
オセロの盤面が一枚  
の石で一気に入っく  
り返っていくように。  
あの気持ち悪い描写  
にも、あの不気味な  
情景にも、意味があ  
つたのか！

最後の舞台装置が  
また驚きで、ここまで  
いろんな要素が盛り  
込まれていることに  
思いがけず感動して  
しまった。作者が全  
力でエンターテイ  
メントしてる！全身  
霊で面白いものを作  
ってくれてる！とい  
う胸の震えで、謎の  
鳥肌が広がった。

ホラー小説でこんな  
不思議な感動に包  
まれるなんて、ほん  
とびっくりだ。

最近のホラーの主  
流は「モキユメン  
タリー」と呼ばれる  
ドキュメンタリー  
(現実のできごと)  
に見せかけたフィ  
クションで、創

作か実話が曖昧なま  
までいさせるため  
に、怪異が何だっ  
たのかを読者の判  
断にゆだねる場  
合が多いのだが  
(そしてそんな  
作品も大好き  
なのだ)、ここ  
までド直球に  
フィクションだ  
からこそその  
面白さで読  
者を楽しませ  
ようとする  
作品に出  
会えて心から  
嬉しい。

ホラーなのに、わ  
くわくする。ホ  
ラーなのに、面  
白いからこれ  
読んで！って  
言いたい！  
「あしや超常  
現象調査」の  
活躍を、これ  
からもみな  
んで見届け  
ようぜ！

やまなか ゆき

一九八〇年 高知市生まれ。  
TSUTAYA中万々店の書店員  
なかましんぶん編集長として  
Xやってます。  
好きな本について喋るとき  
だけ饒舌になります。



# 魚と恋して

## 鏡川水生生物研究会

### 設立に至るまで

小野 暁



今回、伝統ある『文化高知』に若輩ながら寄稿させていただくにあたり、これまでの人生を振り返りながら、団体設立の経緯を話そうと思う。

私の一番古い記憶は、このように始まる。

池のほとりで針のついていない釣り竿を手に時間を忘れて水面を見つめている。当然釣れないことは、幼いながらわかっている。だが、いや、それだからこそ私は、手の届かぬところを悠々と泳ぐ魚たちに想いを馳せていたのだと思う。

私の初恋の瞬間である。

そして、今でも私は、まだ見ぬ魚に想いを馳せている。

私は、幼少より自然と触れ合いながら育った。この頃の夢は、『生き物博士になること』。夢中で生き物を追いかけた日々が懐かしい。

ただ、そんな日々も一瞬で過ぎ去り、中学・高校での生活が始まった。土佐中学校に入学した私は、多くの自由で芯のある先生・生徒たちのもと、たくさんの素晴らしき経験をした。しかし、時が経つにつれて「私が真に自由になれるのはここではない」と思うようになった。もちろん、土佐の校風は非常に気に入っていたが、学校だけではやりたいことをするには限界があったのだ。そこで私は、やりたいことを続け、自由になるため、自分の夢をもう一度見直すことにした。

漠然とした『生き物博士』ではなく、具体的に何をしたいのか。

結果、私の夢は、『魚を研究し、守ることで、自分の感じた、魚に対する感動を未来の人々にも感じてもらおう』というものになった。随分と大層な夢である。今でも大

層な夢だと思う。だが、今この夢は変わらない。

夢が決まってから、具体的に何をすべきかわからず、漫然と日々を過ごしていたある日、知人の勧めもあり、ジンデ池生物研究所所長の植村優人氏の主催するイベントに参加した。植村氏は、トンボ採集家として知られ、須崎にあるジンデ池というため池でトンボの調査を行っていた。

彼は、ジンデ池が、存続の危機に瀕していた際、生物たちを守るため学生で団体を立ち上げたのだ。そんな彼に憧れた私は、『団体を作って、生き物を守る』という目標を持った。

それから、私は、自然を守るためには、身近な自然を深く知らなければ、と考え、幼少より慣れ親しんだ鏡川に足繁く通った。その日々の中で私は、『イドミミズハゼ』というほとんど盲目の貴重な魚を見つけ、すぐに高知大学の遠藤広光教授に連絡をする。この時の興奮と未熟者の私に対する遠藤教授の快い対応は、記憶に新しい。この出来事をきっかけに私の恋心は、再び熱く燃え上がることになった。

これにより、私は、鏡川の自然の素晴らしさを解明し、守り、つ

なげる団体を作りたいと思うようになった。そうと決まれば話は早い。多くの方々の協力のもと、説明会を行ない、学生を含め、20名以上の方が参加してくださった。

これにて、鏡川水生生物研究会の発足である。それから本団体は、学生を中心として、様々な背景を持つ人々が想いを胸に協力しあって活動を行っている。まさに自由である。そして、私は、この自由の中で会員が、幅広い視野をもとに問題を解決できるように頑張ってほしいと願っている。

『恋は人を盲目にする…』とあるが、やはりその力は、計り知れない。魚に恋して至った結論である。

最後に、この場を借りて私を支えてくださった家族や友人、土佐中学校・高等学校の方々、植村優人氏、遠藤広光教授、その他多くの方々に深く感謝を述べたいと思う。要所要所で彼らが優れた考えを教授してくれたから今の私があると思う。皆様、本当にありがとう。

#### おの ひかる

二〇〇八年生まれ。土佐高校二年。鏡川水生生物研究会代表、生物多様性こうち戦略推進リーダー。

# 「ファンテナ」 きもキャラグランプリ 2025参戦



下尾 仁

昨年参加させてもらった滋賀県主催の「きもキャラグランプリ」。「今年もやるんでは是非」と連絡が来た。「もちろん行きます」と返答。ちなみに知らない人の為：はりまや橋から生まれたキャラクター「はりま」と「やばし」というのを僕と友人でやっております。

去年は朝五時に出発。一日目のイベントに参加し、二日目のイベント終了後すぐに高知に帰ってくる強行参戦であったが、今年余裕を持って行こうとイベント前日に会場入り、終了後一泊し、ゆっくり観光して帰ろうと計画。前回同様スタッフで手伝ってくれ車を貸してくれるYさんと、「はりま」と「やばし」の三人で行くことにした。

イベント開催の三日前の天気予報では嵐のような雨になるとのこと。中止になるのではとヒヤヒヤしたが、二日前には雨雲の動きが早くなり、「当日は晴れそうなので予定通り開催します」と主催者から連絡があり、ほっと胸を撫でおろした。五

月九日、イベント前日の午後一時ぐらいに高知を出発。夜勤明けでほとんど寝てない、ゆうやけ君（「やばし」の中の人）、車の持ち主だが、高速道路の運転に自信のないYさん、少し運転が好きで体調も万全な僕が運転することに。少し雨が降る中、順調に進み、観覧車のある淡路サービスエリアで休憩し再出発。CDを変えようとするがカーステレオの中になかなか入っていかない。ウイーンウイーンウイーンと出入りを繰り返しながら明石海峡大橋を走っていると、ウーとCDの出入りする音と若干違う音がした。その瞬間、回転灯を回しながら覆面パトカーが僕たちを追い越し、「着いてきなさい」と言った。路肩が広がっているとところまで誘導され、パトカーに乗せられると、「制限速度80kmのところ、104km出ていたので、24kmオーバー、2点減点の罰金一万五千元です」と青切符を切られた。それからは二人に気を遣わせてもいいけないと、ポジティブな会話で滋賀を目指した。

少し道を間違えたりもしたが、午後七時ぐらいに会場で宿でもある「滋賀農業公園ブルーメの丘」に着。部屋に荷物を置き、この辺りには何もないので、車で十分程の所にご飯を食べに行き、コンビニでアルコールを買い込んで宿で飲むことに。宿泊者はきもキャライベント参加者だけだったので、昨年同様、ロビーで飲み始めた。どんどん参加スタッフが到着してきたのでみんな宴会に。近況報告やイベントをどうやって盛り上げるかなどのお話で楽しく時間は過ぎていった。時計を見ると〇時半を回っていたので、明日の為にもしろそろ解散しよう、とみんな部屋に帰り、眠りについた。

さあ、イベント当日。天気は快晴。各々のキャラになり、入場口でお客さんを迎え入れる。キャラに会いに来た人も去年より多く、盛り上がりそうだと思った。予想通りイベントは大盛り上がりだったが、「はりま」と「やばし」のグッズブース隣、似顔絵世界一になったことのある「色紙の妖精しきしき」の似顔絵コーナーに長蛇の列。そして右隣、YouTubeで大バズり中の地元キャラ「びわ湖くん」のブースにも長蛇の列。長い列に挟まれた弱小キャラブースで、スタッフのYさんはポツンと立ち尽くすしかなかった。僕たちのステージアピールの時、「スピード違反で捕まり、罰金を稼がないといけないので、是非グッズ購入

よろしくお願いします。今なら並ばず、すぐ買えます」と話すると想像以上にウケてくれた。盛り上がったイベントはあつという間に結果発表。一位は人気爆発中の「びわ湖くん」。僕たちは大健闘の三位であった。イベントも無事終了。みんなに「また会おう」と別れを告げ、宿に向かった。宿にはシャワーしかなかった。近所の銭湯に行くことに。銭湯に入ると体に絵の入った方ばかりで、ちよつとびっくりしたが、湯船で話もでき、まさに「裸のつきあい」をさせてもらった。銭湯で疲れもとどろ、酒もたらふく飲み、次の日、比叡山や京都観光をして、高知に無事到着。キャラを作ったことで、色々な県に行け、普段会えない人たちとも知り合えて、本当に貴重な経験をさせてもらっている。明石海峡大橋でキップを切られたのも貴重な経験だ。とポジティブに捉え、四国銀行に罰金を納めに行った。

さあ、次は何が待っているのか？もし良かったら、イベントに呼んでください！

## しもお ひとし

一九六九年生まれ。  
岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

# 5～7月の事業から

## 第77回高知市展

今年も高知の初夏を彩る「高知市展」

を、五月二十四日（土）から六月八日（日）までの期間で、高知市文化プラザかるぽーと七階BILBOギャラリーで開催しました。本展は、アンデンバンダ（公募・無審査）形式の総合美術展として市民に広く開かれたものであり、参加者の自由な創作活動を尊重する場として長年親しまれてきました。

本年度は四二六名の出品者による計五七四点の作品が寄せられました。作品は絵画、日本画、書道、先端美術、彫刻、陶芸、工芸、写真、ペン字、デザインと多彩なジャンルで、個性あふれる力作が会場を彩りました。会場を訪れた方からは、「皆さん生きがいや趣味をもたれていて素晴らしいと思いました」「毎年拝

見しています」「無審査なのに年々レベルが高くなっていく感じがします」「来年を楽しみます」といった声が多く寄せられました。

また、姉妹都市である北海道北見市との美術交流の一環として、同市からの出品作品三十二点もあわせて展示しました。これにより、地域間の文化のつながりをより強め、さらに多様な芸術表現に触れる機会を市民に提供することができました。高知と北見、それぞれの地域が育んできた芸術性や感性を作品を通して感じることが、来場者にも深い印象を与えたようです。

会期中の六月一日（日）には、小中学生を対象とした体験型美術イベント、子どもアートまつり「あなたダビンチほ

くピカソ」を開催しました。かるぽーと館内および北広場に設けられた各種ブースでは、子どもたちが自由な発想で絵を描いたり工作を楽しんだり、創作の喜びに触れる姿が見られました。多くの親子連れでにぎわい、未来の表現者たちにとって貴重な体験の場となったことでしょう。

来年の高知市展は二〇二六年五月二十三日（土）から開催の予定です。次回の高知市展に向けて、市民一人ひとりの表現の場をひろげ、地域文化のさらなる発展に貢献できるよう、また、誰もが自由に参加できる開かれた芸術の場として、継続・発展していけるよう努力していきます。

入場者数 二一五二名

## 第97期高知市民の大学 総合コース(金曜)

# 古典文学を楽しむ夕べ

一九七七年に始まり、この春97期を迎えた高知市民の大学では、人文科学の領域、それも古典文学という分野のコースを初めて開講しました。これまで長く、社会科学・自然科学の二つのコースが設定されており、また二一世紀を目前に総合コースが開設され、多彩な視点から学びを深めてきたなかでの試みです。

全十五回、主に平安期から一四世紀初頭に焦点を定め、十三人の講師による、濃密なラインナップで贅沢なコースになりました。「令和」という新元号をきっかけに盛り上がりをもせた古典ブームは昨年のNHK大河ドラマ「光る君へ」の後押しもあったのか、受講生と講師の熱気を帯びた魅力溢れる講義が続きました。奈良時代に成立した万葉集から平安時代へ、文学の花が開くように様々な物語

が生まれます。なかでもやはり『源氏物語』『枕草子』をテーマにした講義はコースの三分の一を占め、平安文学の双璧、紫式部と清少納言の強さを感じます。またこれらの文学に影響を与えた『文選』の「きはめてよみにくき」内容も市民の大学ならではの深掘りがされていました。

印象深かったのは第十回「土佐日記を読む」。後任国司の島田公鑑が遅れたため、紀貫之が土佐から帰京するのも遅れたことについて、講師の川島禎子さんの「本来なら台風シーズンの頃に海路を帰らなければいけなかったところを島田公鑑が遅れたことで平穏な帰路になった」と思っ、島田公鑑には感謝ですね」という紀貫之への思い入れも感じさせるユーモア交じりのコメントに笑いが起こりました。『土佐日記』に出てくる地名は現

在では謎の部分も多く、受講生たちも地元に残る紀貫之の足跡について、それぞれの思いを発言していました。

また第二回「平家物語 安徳帝の最期」では「述語の逆読み」という広井護先生の教えは、受講生にとつてまさに「目から鱗が落ちた」瞬間だったようです。

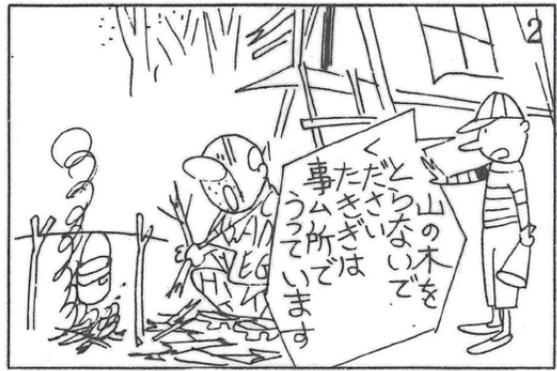
古典文学は現代語と違うというその性質から難解に思われますが、読み解いていくと、やはり昔の人々も現代の人間と同じようなことを考え、同じように感動し、悲しみ、人生を謳歌していたことがわかることと思います。それは『今昔物語集』に題材を求めた芥川龍之介の作品群からも窺えることでしょう。

古典の世界に詳しい方も、またこれまでは「難しそう」と苦手に思っていた方も、この講座で新しい知見を得られたのであれば幸いですし、これからもますます古典文学に魅了されていく人が増えるのでは、と思える講座となりました。

開催期間 二〇二五年四月四日～

七月十一日

会場 高知市立中央公民館  
コース受講者数 七十五名



# フクちゃん

© 横山隆一 / 横山隆一記念まんが館 (1960年)

もうかれこれ四十年近く高知県の文化行政に携わっている。委員として高知の芸術文化に物申してきたが、会社を定年退職したことで、この度一パフォーマーに戻り、「ご意見番と表現者との二刀流でやっていくこと」にした。その第一弾は、半世紀ぶりのバレエの舞台への復帰である。

よさこい文化が根付いた高知では、舞踊系の受け入れのハードルは低く、ダンスが身近にあると感じる。私自身はバレエ、モダン、コンテンポラリー、ジャズダンスといった変遷を辿り、十年前にクラシックバレエに原点復帰した。

しかし、白鳥のように軽やかに踊れた子ども時代と違って、復帰直後は完全にみにくいアヒルの子。定年退職とバレエ団の七十周年が重なったことで、今年はやっと重い腰を上げて再び舞台上に立つことになったが、発表会四カ月前に衣装が入らない。先生から、「5キ口痩せて」と軽く指示された。思わず「ムリ〜」と言いそうになった。

朝昼のご飯を80グラムに減らし、おかずは作り過ぎず。会社員時代に身についた早飯をやめ、よく噛むこと。すると二カ月弱で6キ口減、腹

## ゴールの効用

**風俗歳時記**

文化活動を行う人たちは、展覧会やステージといったゴールを決め、計画を立て準備をして本番までに仕上げる。これは当たり前前のことだが、表現者のモチベーションそのものである。続けてきたバレエのレッスンは、練習することに満足して、それから先のことを考えていなかったのだと思う。自分が何になりたいのか、どうしたいのかという緊張感に欠けていたと痛感する。さあ、次のゴールは：口外することで、自身にプレッシャーをかけるのも悪くない。

(立花香)

囲9センチ減。健康診断では、昨年と見比べた看護師さんに、「病氣しました？」と恐る恐る聞かれた。「いえ、ダイエットです！」(笑) 初老でも、「やればできる」を体感した。

バレエの練習だけを続けた十年は、大る一方だった。目標ができたことで、簡単に理想の体重と体型になった。なんとなく続けるのではなく、期限付きのゴールの効用を思い知らされた。

# 多田淳之介演出 真夏の夜の夢

## 出演者・サポーター募集

一線で活躍する演出家の多田淳之介氏を迎え、障害の有無や社会的立場などの枠を取り払い、参加者の個性を活かした形で映画できる舞台芸術作品を制作します。共に作品を創り上げる、出演者・サポーターを募集します。

- 募集対象 高知県内に在住する中学生以上の方（サポーターは高校生以上）
- 応募条件 面接・稽古・本番に参加できる方  
【面談日】2025年8月30日(土)・31日(日)のいずれか  
【稽古日程】10月3日(金)以降、平日18:30~21:00、土日祝13:00~17:00  
【本番日時】10月26日(日)14:00開演 高知市文化プラザかるぼーと四国銀行ホール
- 出演参加料 2,000円
- 申込方法 右のQRコードから申し込みいただけます
- 申込締切 8月20日(水)

主催：公益財団法人高知市文化振興事業団  
助成：一般財団法人地域創造  
お問い合わせ：公益財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071



第207回  
市民映画会

9月25日(木)  
9月26日(金)

高知市文化プラザかるぼーと 四国銀行ホール

上映時間  
敵  
①11:00 ②15:25 ③19:30  
ぼくとパパ、約束の週末  
①13:20 ②17:30

【入場料】一枚のチケットで両方の作品をご鑑賞いただけます。  
一般：前売券1,300円、当日券1,500円  
割引：1,000円（映画会当日に会場にて販売）  
※学生証、長寿手帳、障害者手帳等をお持ちの方は割引  
【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071

## 風伯

### 墓じまい

世話になった墓石業者に頼んだ。金曜日下見に行くことになった。恩師と最後にお墓まで上がることができたのは私一人。でも十年以上前のことだ。先に見に来てよかった。途中から数人の壁。まったく進路不明。東京の恩師と業者は伝えた。恩師は山中に詳しい集落の女性に協力を要請した。木曜日私はいの大国さまに墓所到達を祈願。

新緑、高知はもう夏。月曜日、貴重な休みの日の娘に同行を頼み、仁淀川沿いを恩師A家の墓所に向かう。墓じまい、下見の下見に。恩師から頼まれて、いや、私が「もう誰も行けない山奥の墓参は無理ですよ」と言ったのだ。故郷には既に家もない。傘寿過ぎて恩師も数十年悩んだ墓じまいを決断した。見積もり段取りは、私の母のときお

## 今号の表紙

### アイス

矢野 健太

夏は暑いので、少しでも涼しいと思ってもらえるように、アイスとプールを掛け合わせてひんやりした色合いでまとめました。

(やの けんた/

龍馬デザイン・ビューティ専門学校2年生)

金曜日曇り、薄日適温。午前十時高知市出発。下見業者は四名体制、若手二人が草刈り機二台実装。予定通り集落の女性も加わり万全の体制で進行。藪奥は大きい竹も密集。かつて茶畑だった。その先に墓に続く登り小道があるはず。草刈り機をフルに使いながら進む。だが、山道は見つからない。道が埋もれているというより消失している。上段から土砂が崩れ草木深く自然に戻った。獣道のようなところを列り払い上がってみるが行き止まり。難攻不落、進退きわまる。女性から電話で現況を問われた集落の男性は「マムシに気を付けろ」「暑いならんとマムシは出る」と女性。この女性がしなやかな力モシカのように上段へどんどん上がる。苦闘二時間超、草刈り機の燃料が二台とも切れたころ、ついに藪に埋もれたA家墓十二基、「見つけた」の美声が聞こえた。

(昌)



\*\*\*\*\*  
第14回  
高知の  
音楽活性化事業

- エルガー  
―愛の挨拶―
- サン＝サーンス  
―白鳥―
- ショスタコーヴィチ  
―チェロ・ソナタニ短調 作品40―  
ほか



人の声に一番近い楽器と言われるチェロ、  
その心地よい音楽をご堪能ください♪

# 加藤 文枝

チェロ リサイタル

# Recital

2025.9.13 [sat]



ピアノ | Kaede Ozawa |  
小澤 佳永

©Shin Yamagishi



高知市文化プラザかるぽーと  
四国銀行ホール 開場 13:30 開演 14:00

チケット 一般/前売り 1,000円 当日 1,200円  
高校生以下/前売り 500円 当日 600円 全席自由

お問い合わせ 公益財団法人高知市文化振興事業団 TEL:088-883-5071  
<https://www.kfca.jp/kikaku>